

高校生の「ゆとり」経験について（2）

—「ゆとり」感とそれを感じている活動に対する考え—

西野 仁（東海大学）

I、はじめに

ゆとりある教育をめざして1992年に導入された学校週5日制は、1995年4月より、月2回へと拡大された。この教育制度の改革によって、児童・生徒の週間リズムは、従来の「6 and 1（6日登校1日休み）」から、「5 and 2（5日登校2日休み）」との併用へと大転換することになった。このリズムの変化によって、高校生の日常生活とくに「ゆとり」経験はどのように変わるのか。これらを明らかにすることを目的に、1996年1月から6月にかけて、首都圏の高校生2年生455名を対象に、一週間にわたるESM（経験標本抽出法）調査を実施した。¹⁾ この調査で得た総計12,064件の高校生の日常生活経験のサンプルを使って、高校生の「ゆとり」経験について、まず、「どんな場面で、ゆとりを感じているか、その時のムードはどうか」を分析した。そこから、①ゆとり感に週間リズムが存在していること ②ゆとりを感じやすい活動、場所、同伴者は特定できること、③ゆとりを感じている時はポジティブなムードが目立ち、感じていない時は、ネガティブなムードが目立つことなどが明らかになり、第28回大会で発表した。²⁾ 本調査研究は、その続編であり、「ゆとり感とそれを感じている活動に対する考え」について分析したものである。

II、研究の目的と方法

1、研究の目的

人の「ゆとり感」は、日常生活の場面場面で変化する。ある場面では、大いにゆとりを感じ、また別の場面では、全くゆとりを感じない。ゆとりを感じる場面では、あるいは逆に、ゆとりを感じない場面では、その時経験している活動をどのように考えているのだろうか。「その活動をもっと続けたいと考えているのか、それともやめたいのか」、「その活動は自分で選んだのか、それとも、求められたからか」など活動に対する考えは、ゆとり感の程度によって違いがあると推測できる。

本研究は、高校生の日常生活において、「ゆとり」を感じている程度によって、その時行っていた活動に対する考えがどう異なるかを明らかにすることにある。具体的には、「ゆとり」感の程度と、その時経験している活動に対する「活動選択の自由性」、「動機の内発・外発性」、「活動継続の欲求」、「活動への取り組みに対する真剣さ」、「活動の難易性」について記述することである。

2、研究の方法

1) 調査方法

本研究では、Experience Sampling Method (ESM) を用いて、データを収集した。ESMは、われわれの就寝から起床までを除く「日常生活経験」を母集団と考え、そこから「経験の標本」をランダムに取り出し、そのサンプルデータから、人の日常経験のパターンやスタイルを推測しようとする調査方法である。³⁾ (ESMの方法論的特徴と有効性については、西野らの発表を参考にされたい。)

2) 調査対象、時期、地域

調査は、首都圏の高等学校 12 校を選出し、各校の 2 年生の男女計 35 名程度の調査協力者、計 455 名を対象に、1996 年 1 月から 6 月に行った。データ収集のためのポケットベルの呼び出しは、コンピュータプログラムを開発し、午前 7:00 から午後 10:59 までの間に、2 時間毎にランダムに 1 回、一日計 8 回、木曜日から翌週水曜日までの一週間連続して行った。ポケットベルの受信可能地域は、東京、神奈川、千葉、埼玉をほぼカバーする地域である。

3) データのスクリーニング

回収したデータは、あらかじめ設定した基準に照らしてスクリーニングを行い、331 人 (72、7%) の 12,064 (64、7%) 場面での経験の標本を分析の対象とした。331 人は、男子 126 名 (38、1%)、女子 205 名 (61、9%) であり、やや学業成績上位の者が多い傾向にあった。

4) 回答記入の状況

1 日 8 回連続 7 日間のポケットベルの呼び出しにより、調査票への回答記入が可能な回数は一人につき最大 56 回、331 人で計 18,536 となるが、実際には 12,064 サンプルの経験が報告され、記入率は 65、1% だった。また、ポケットベルの呼び出し後、5 分以内に 51、8% が、30 分以内に 75、91% が、一時間以内に 89、4% の回答が記入されていた。

回答記入ができなかった理由について、「混雑したバスや電車の中にいた (16、2%)」、「授業中だった (15、1%)」、「入浴あるいはシャワーを浴びていた (12、8%)」、「スポーツをしていた (11、9%)」が主なものであり、「面倒だった」は 7、4% であった。

5) データのコード化と得点化

調査票回収後、活動内容については、NHK の生活時間調査と余暇開発センターの余暇活動調査の分類を参考に作成したコード表に従ってコード化し、複数のコーダーによるチェックを行った。また、7 段階尺度のデータはそのまま数値を入力した。

「ゆとり感」は、7 段階のリッカート尺度の質問項目「あなたは、どの程度ゆとりを感じていましたか？」に「まさにそう感じていた」との回答を 7 点、逆に「全くそうは感じていなかった」を 1 点とした。「活動選択の自由性」、「動機の内発・外発性」、「活動継続の欲求」、「活動への取り組みに対する真剣さ」、「活動の難易性」については、表 1、Note 2 のような質問項目とスコアを用い、計算と分析は、統計プログラム SAS を使った。

Ⅲ、結果および考察

1、ゆとり感と活動に対する考え

ゆとり感の強さと、5 項目の活動に対する考えは、表 1 のようにまとめられる。すべての項目において、ゆとり感の強さに応じて、活動に対する考え方が方向性を持って変化している。ゆとり感が強いほど、「自分で選んだ」、「活動そのものがやりたかった」、「もっと続けたい」、「真剣だ」、「簡単だ」と考える傾向が有意に認められた。しかし、活動に対する真剣度は、他の項目に比べると、ゆとり感が強い時と弱い時の差が小さかった。また、どの項目においても、ゆとりを感じにくい時の標準偏差が高くなっている。

ゆとり感と活動に対する考えには、「活動選択の自由性」、「動機の内発・外発性」、「活動継続の欲求」、「活動への取り組みに対する真剣さ」は正の、「活動の難易性」は負の、有意な相関が認められた。

表1 ゆとり感と活動に対する考え

ゆとり感		選択の自由性	動機の内外発性	継続欲求度	活動への真剣度	活動の難易度
まさに感じる	MEAN	6.5	5.76	6.09	4.96	1.83
	S.D.	1.24	1.69	1.49	1.71	1.48
	n	2198	2200	2200	2195	2200
感じる	MEAN	5.85	5.18	5.33	4.7	2.47
	S.D.	1.39	1.62	1.37	1.44	1.59
	n	1972	1972	1970	1971	1972
まあ感じる	MEAN	5.28	4.82	4.62	4.45	2.87
	S.D.	1.55	1.59	1.34	1.4	1.57
	n	2360	2362	2362	2361	2360
どちらとも言えない	MEAN	4.72	4.33	3.94	4.44	3.38
	S.D.	1.75	1.67	1.49	1.43	1.66
	n	2317	2317	2319	2312	2316
ほとんど感じない	MEAN	4.27	4.07	3.33	4.34	3.87
	S.D.	1.84	1.85	1.45	1.57	1.73
	n	1310	1310	1311	1311	1310
感じない	MEAN	3.9	3.87	2.73	4.34	4.25
	S.D.	2.06	1.94	1.59	1.81	1.9
	n	957	956	957	956	957
全く感じない	MEAN	3.78	4.12	2.14	4.47	4.45
	S.D.	2.5	2.35	1.69	2.21	2.25
	n	909	911	911	906	911
		***	***	***	***	***
ゆとり感との相関係数		0.463 ***	0.317 ***	0.635 ***	0.111 ***	0.44 ***

Note1: ***p<.0001

Note2:実際の質問項目とスコアー

選択の自由性:それは自分で選んだ活動ですか? それともするように求められた活動ですか?

自分で選んだ 7 --- 求められた 1

動機の内外発性:それは、その活動そのものがやりたかったためですか? それとも他の目的のためですか?

活動そのもの 7 --- 他の目的のため 1

継続欲求度:それを、もっと続けたいですか? それともやめたいですか?

もっと続けたい 7 --- やめたい 1

活動への真剣度:それをどのくらい真剣にやっていましたか?

真剣だ 7 --- 真剣ではなかった 1

活動の難易度:それをする事はあなたにとって簡単なことですか? それともチャレンジを必要とすることですか?

チャレンジが必要 7 --- 簡単 1

2、ゆとり感と、活動選択の自由性と動機の内外発性

活動の選択自由性を Y 軸に、動機の内外発性を X 軸にとり、7 段階のゆとり感の強さをプロットしたのが図 1 である。ゆとりをまさに感じている時、選択の自由性は高く、内発的動機も強い。ゆとりを感じる度合いが弱くなるにしたがって、選択の自由性は減じ、内発的動機も弱くなる。

また、ゆとり感 Y に対する選択自由性 X_1 と動機の内外発性 X_2 の回帰式は $Y=1.7514+ 0.3805 X_1+ 0.1823 X_2$ であった。(R²=0.2453)

(0.0001) (0.0001) (0.0001)

選択自由性の標準偏回帰係数は 0.4019、動機の内外発性のそれは、0.1878 であった。

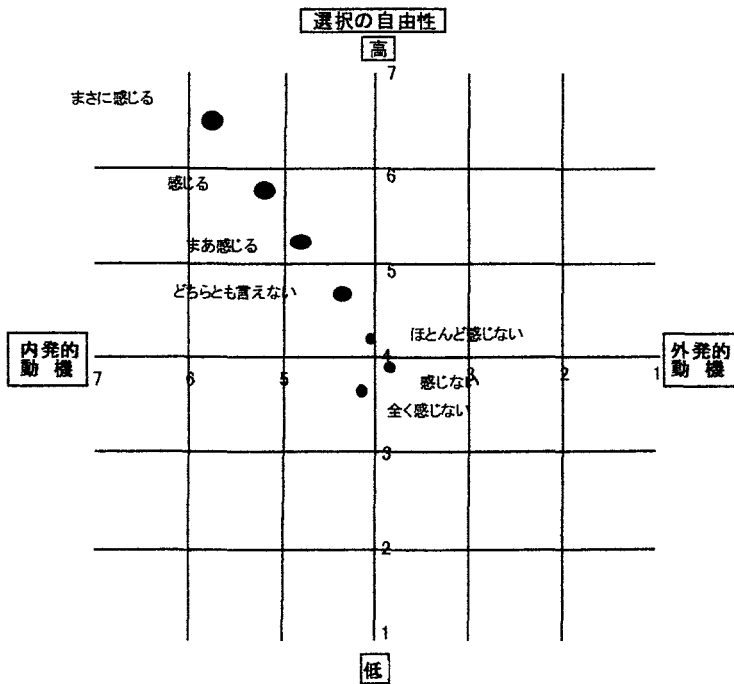


図1 ゆとり感と活動選択自由性・動機の内外発性

IV、まとめ

本研究で、ゆとりを感じる程度とその時に経験している活動に対する考え方には、高い関連があることがわかった。とくに、ゆとり感が強くなるにつれて、その活動に対する選択の自由性と動機の内発性が強まることが確認できた。この結果は、Neulinger⁴⁾や Iso-Ahola⁵⁾らが主張するレジャー経験の特徴に類似している。前回発表した「ゆとりを感じずる経験はポジティブなムードを伴う」という結果と合わせると、欧米でいうレジャー経験は、ゆとりを感じずる経験に近いのではないかという新たな仮説を導きたくなる。その仮説を検証しようとするためには、佐橋⁶⁾が着手しているように人がレジャーだと主観的に捉える経験についてのサンプルをできるだけ多く収集しその結果をゆとりを感じる経験と比較検討することが必要となる。幸い、本研究で用いたESMデータには、それらが含まれているので、早急に分析に着手する予定である。

参考文献 1) Nishino, H. (1977) Will the two-day weekend bring more leisure (yutori) for Japanese Adolescents? Thesis submitted for the degree of Doctor of Philosophy in Leisure Studies in the Graduate College of the University of Illinois.

2) 西野、高校生の「ゆとり経験について」-いつ、どんな場面で「ゆとり」を感じ、その時の気分はどうか-、レジャー・レクリエーション研究第39号、50-53、1998

3) 西野・知念、ESMを用いた日常生活におけるレジャー行動研究の試み、レジャー・レクリエーション研究第38号：1-15、1998

4) Neulinger, J. The Psychology of Leisure, Charles C. Thomas, 1978

5) Iso-Ahola, S.E. The Social Psychology of Leisure and Recreation, W.C.B.,1980
 佐橋、日常生活におけるレジャー経験の検討-40・50代既婚女性を対象として-、レジャー・レクリエーション研究、第39号、46-49、1998